

【資料4-1】

平成29年度 群馬県立文書館 古文書解読・学習団体調査

結果報告（2018年8月1日）群馬県立文書館運営協議会

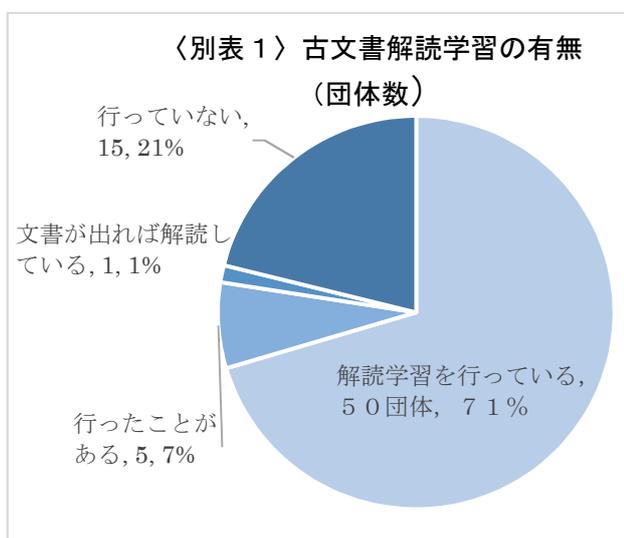
※昨年度開催した県立文書館運営協議会での意見を受け、県内の古文書解読・学習団体（71団体）を対象にアンケート調査を実施（平成30年3月）

当館では平成元年度（1989年度）と平成7年度（1996年度）にも同じような調査を行い、それぞれの結果は当館紀要『双文』の第7号（田嶋亘）と第14号（古文書課）で報告されており、過去の『双文』の報告と比較したい。

まず、本調査では現在、古文書解読学習を行っている団体は〈別表1〉のように、50団体把握できた。この数は〈別表2〉のように、過去調査と比べると、大きな増減はない。

もちろん、本調査では調査漏れ等により依頼できなかった団体もあるため、県内の解読学習団体の総数が50にとどまらないことは事実である。

また、団体数は過去調査とほとんど変わらなかったものの、後述するように、過去調査と比較すると、活動地域の偏りや、高齢化や会員減少による活動の低下、団体存続の危機等、極めて深刻な問題を抱えている。



〈別表2〉解読学習団体の数（過去調査との比較）

	平成元年度	平成7年度	平成29年度
解読学習を行っている	45	55	50
解読学習を行っていない	0	29	21
無回答・そのほか	26	56	0
合計	71	140	71

【解説学習していない団体】

解説学習を行っていないことが判明した 21 団体は、活動内容を見ると、〈別表 3〉のように、多くはいわゆる郷土史研究団体といえるだろう。

しかし、このうち解説学習を以前行ったことがある団体が 5 あり、そのほかに「系統的な学習は行っていないが、関係文書が出された場合、解説している」団体が 1 あった。前者からは「古文書講座は予想以上に受講者は多かったが、身近な史料の絶対量は少ないので、継続しきれなかった」という回答もあった。

また、解説学習を行ったことはない団体からも、「会員が大部分を占める古文書解説・学習団体で学習している」「古文書解説の学習会等も取り入れていきたいと考えている」という回答があった。また、解説学習を行ったことはないという団体の刊行物でも、古文書が釈文・解説ともに取り上げられている場合がある。

このように、郷土の歴史文化に係る団体においても、古文書は無関係ではないことが把握できた。何かしらの支援等があれば、古文書の解説学習あるいは古文書の活用に取り組んで頂ける可能性があると思われる。

本報告は、当館が文書館であり、過去調査との比較もできることから、質問 18～20 を除き、古文書解説学習団体を中心に述べるが、古文書と密接な歴史分野や、古文書にいくらかの関心のある人や団体にとっても、参考になる部分があればいいと思う。

地元の地域文化研究	11
県内の地域文化研究	5
地元の史跡・文化財の普及・学習	2
伝統芸能の公演	1
地元の偉人の顕彰	1
活動停止	1
合計	21

【本報告の回答団体等について】

以下に調査の質問の順番に沿って報告するが、質問 1～10 までは全 71 団体対象である。次いで、質問 11～17 までが古文書解説学習を実施している団体 50 団体のアンケートの集計概要である。最後に、質問 18～20 までが解説学習を実施していない 21 団体のアンケートの集計概要である。

なお、本報告はわかりやすくするため、具体的な記述の回答を内容ごとに分類して集計したものが大半である。また、個別の回答は発表資料の性格上、表現・表記を改めたり、要旨のみを紹介した回答である。

質問1 (団体名)、質問2 (代表者名)、質問3 (連絡先)

これらから把握した活動地域は〈別表4〉の通りで、()内の数字は古文書解読学習を行っていない団体の数である。なお、過去調査の結果は現在の市町村に当てはめて計上した。また、本調査で設けた「県全体」とは、会員が県内各地にいる団体を中心に、回答から判断したものであり、過去調査では前橋市に計上されている可能性がある。

〈別表4 解読学習団体の活動地域〉

()内は解読学習を行っていない団体の数

		平成元年度	平成7年度	平成29年度	
0	県全体	0	0	2	(6)
1	前橋市	9	12	6	(2)
2	高崎市	4	5	6	(8)
3	桐生市	3	4	5	(1)
4	伊勢崎市	2	6	3	(1)
5	太田市	3	2	4	(0)
6	沼田市	2	1	1	(2)
7	館林市	1	1	1	(0)
8	渋川市	1	4	2	(0)
9	藤岡市	0	0	2	(0)
10	富岡市	2	1	1	(0)
11	安中市	2	4	6	(1)
12	みどり市	0	2	2	(0)
13	榛東村	1	0	0	(0)
14	吉岡町	1	1	1	(0)
15	上野村	0	0	0	(0)
16	神流町	0	0	0	(0)
17	下仁田町	1	0	0	(0)
18	南牧村	0	0	0	(0)
19	甘楽町	1	0	0	(0)
20	中之条町	0	1	2	(0)
21	嬭恋村	1	1	1	(0)
22	高山村	1	1	1	(0)
23	東吾妻町	2	1	1	(0)
24	長野原町	1	1	0	(0)
25	草津町	1	1	0	(0)
26	片品村	0	0	0	(0)
27	川場村	1	1	0	(0)
28	みなかみ町	3	2	0	(0)

29	昭和村	1	1	0	(0)
30	玉村町	1	1	1	(0)
31	大泉町	0	0	2	(0)
32	板倉町	0	0	0	(0)
33	千代田町	0	0	0	(0)
34	邑楽町	0	0	0	(0)
35	明和町	0	1	0	(0)
団体数合計		45	55	50	(21)
活動地域が市		29	42	41	
活動地域が町村		16	13	9	
団体存在市町村数		23	23	19	6
うち町村数		13	12	7	

本調査では〈別表4〉の通り、解読学習団体は19市町村に存在した。つまり、県内全35市町村のうち、半数以上の市町村で定期的に活動していることになる。

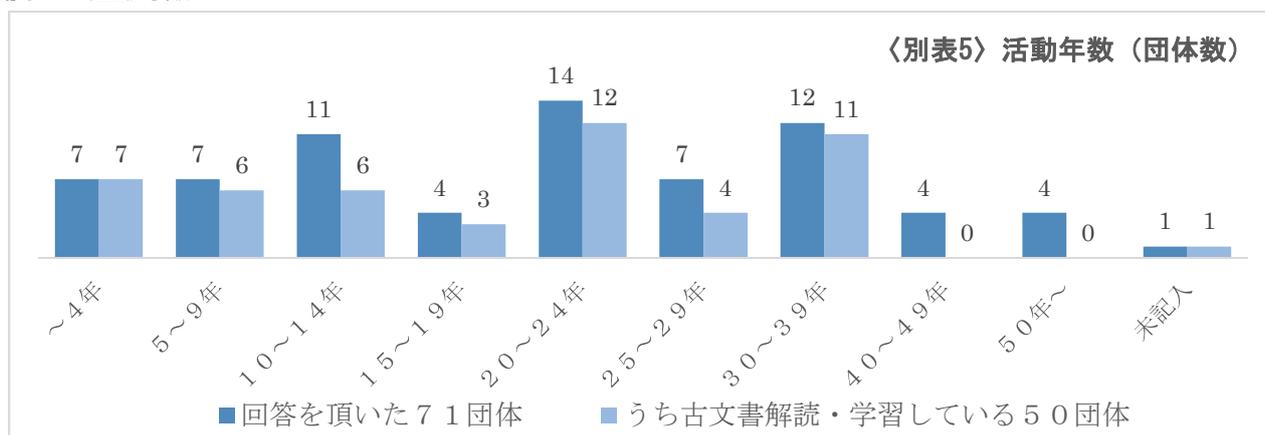
しかし、県内の全市12市に41団体が存在する。さらに団体数や活動地域等の回答を見ると、人口の多い平野部の市や、市の中でも中心部に集中していた。

一方、県内町村のうち、団体を把握できたのは7町村であり、平成元年の半数程度となっている。また、6団体が存在する3町2村（吉岡町、東吾妻町、中之条町、高山村、嬬恋村）は榛名山麓の町や、吾妻郡の町村であり、全て県北西部の町村である。これに対し、3団体が活動する2町（玉村町と大泉町）はいずれも規模の大きい市に隣接し、県南部の平野にある、という共通点をもっている。つまり、地域に大きな偏りが生じている。

しかし、平成元年度調査では「特定地域に偏するという傾向は見られない。都市部と農村部と比率も相半ばする」と概括している。また、平成元年度と7年度は現在の23市町村に団体が存在し、特に後者には55団体が存在していた。

以上の結果を見ると、この約20年の間に解読学習団体が活動する地域が減少し、市内中心部を中心に限られてしまっている。地域住民にとっては、古文書解読に興味を持ったり、解読学習に取り組む機会がなく、解読学習が身近に存在しない“空白地域”が相当広大になってしまっている。特に、合併を経た旧市町村部の場合、過去には地域の古文書を用いた解読講座や団体が存在していても、現在の地域住民は、解読学習や古文書そのものと無関係になってしまっている状況が懸念される。

質問4 活動年数（結成から2018年までの年数）

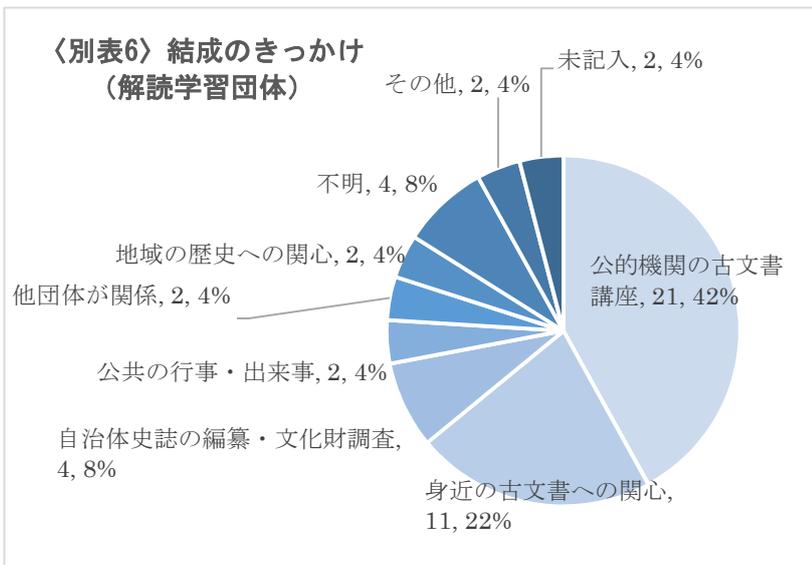


解読学習団体の最多は〈別表5〉のように20～24年で、次は30～39年であり、それぞれ5分の1以上を占める。20～39年の合計は27で半数以上になる。

一方、4年以内、5～9年以内、10～14年以内はそれぞれ6、7あり、19年以内の合計は22で半数近くを占める。このように、長く活動している団体の方が若干多い。

しかし、解読学習をしていない団体には、それ以上に長く活動している団体が目立つ。40年以上の団体が8もあり、最長は郷土史研究団体83年、伝統芸能団体164年という大きな特徴が見られる。

質問5 結成のきっかけ



【「その他」】

- ・ 地域に残る古文書や隣村町村の交流により頂いた資料を解読、また、教育委員会から求められた。
- ・ 文書館の研究会に参加した数名で発足、30名位だったが激減した。

解読学習団体の結成のきっかけは「公的機関の古文書講座」が4割以上を占め、過去調査と同じく、解読講座の影響の大きさが浮き彫りとなった。また、「自治体史誌の編纂・文化財調査」、世界遺産登録推進や公民館の古文書の展示等の「公共の行事・出来事」と合計すると、27団体という半数以上の団体が、市町村や地域の公民館、あるいは県および当館の事業により結成された、という大きな特色がある。つまり、市町村や県の働きかけ・事業(特に古文書解読講座)により、地域の古文書を解読学習する団体が新たに誕生する可能性は高いといえよう。

一方、解読学習していない団体については〈別表7〉のような結果となった。郷土史研究団体だけでなく、多様な団体があることがうかがわれる。

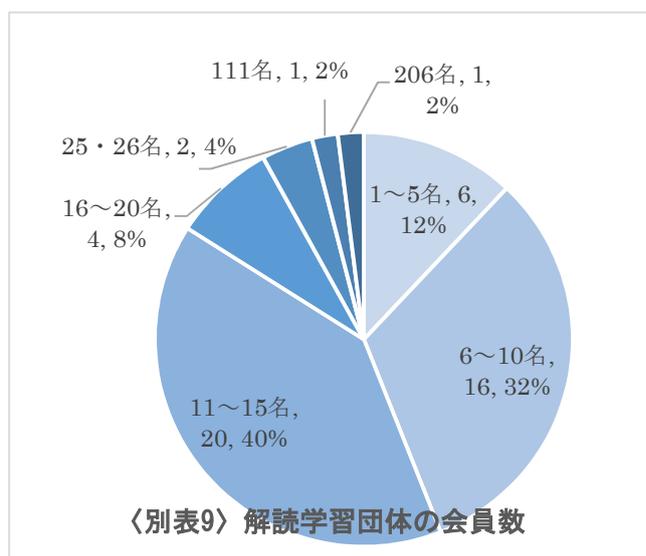
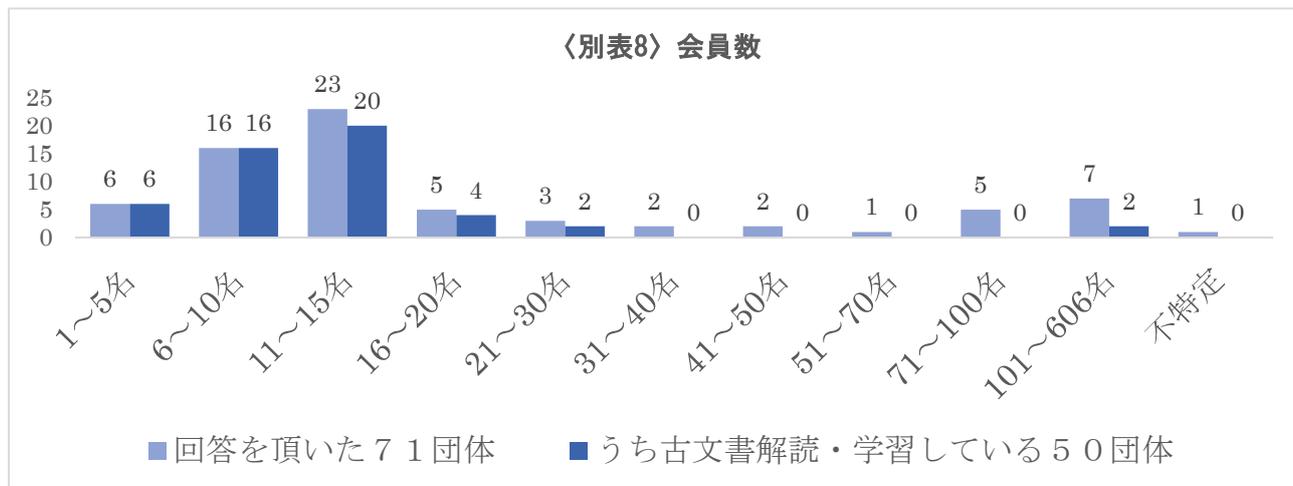
〈別表7〉 解読学習していない団体の結成のきっかけ

地域の歴史への関心	6
公共の行事・出来事	3
公的機関での歴史講座	2
自治体の史誌編纂・文化財調査	2
郷土の歴史文化の振興	2
他団体の関係	1
その他	5

【「その他」より】

- ・ 群馬県の歴史文化の振興。
- ・ 藩政期の出来事を描いた紙芝居の復元。
- ・ 高崎歴史博物館の創建のため。

質問6 会員数 (2018年3月1日時点)



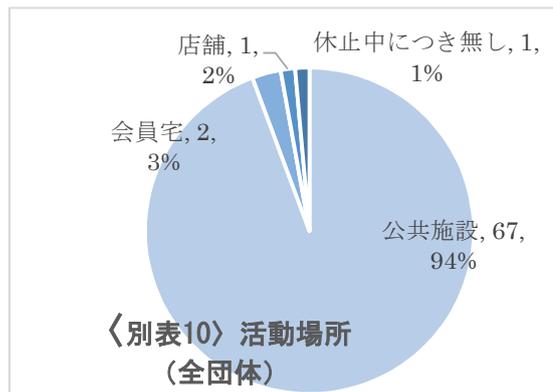
解読学習団体における会員数の最多は〈別表9〉のように206名だったが、世界遺産に関わる団体であるため、実際の解読学習会への参加人数は不明である。対して、全員が解読学習を行っている団体の最多は111名である。ところが、次は26名、25名（各1）となり、11～15名が4割を占める。また、10名以下が44%、5名以下が12%であり、合計すると15名以下が84%を占める。

しかし、平成7年度調査では「古文書解読学習団体としてもっとも平均的な一団体の会員数は約10～30名程度の団体といえる」と概括している。この概括と、後述の「問題点」で高齢化・会員減少を挙げている団体が多いことを合わせると、約20年間で会員が大きく減ってしまい、少人数で活動している団体はかなりあると思われる。（なお、平成元年度調査では「十人から二十人程度が平均的であるといえる」と概括している）。

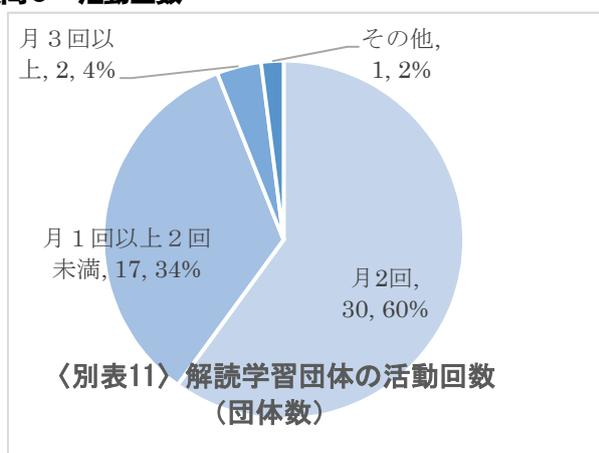
一方、解読学習をしていない団体の会員数は概して多く、51名以上の団体が半数以上を占める。101名以上も6団体ある。最多は606名、ほかに不特定の団体が1あり、この点でも、解読学習団体とは対照的である。

質問7 活動場所

71団体を集計した〈別表10〉のように、公共施設が圧倒的に多い。その理由として、調査方法の一つが市町村を通じたものであったことも考えられる。そのため今回把握できなかった団体には、会員宅等の公共施設ではない場所で活動している団体が存在する可能性がある。とはいえ、過去調査の結果も同様なので、活動の場所の多くは今後も、各市町村の公民館、図書館、資料館等であると考えられる。なお、当館で解読学習を行っている団体は2団体ある。



質問8 活動回数



【「その他」】

- ・定例学習会（午前組・午後組に分かれて学習）、特別学習会1（午前中は以前の解読分の読み返し、午後は新たな分の解読学習）、特別学習会2（午後）を各月1回。

〈別表12〉解読学習していない団体の活動回数

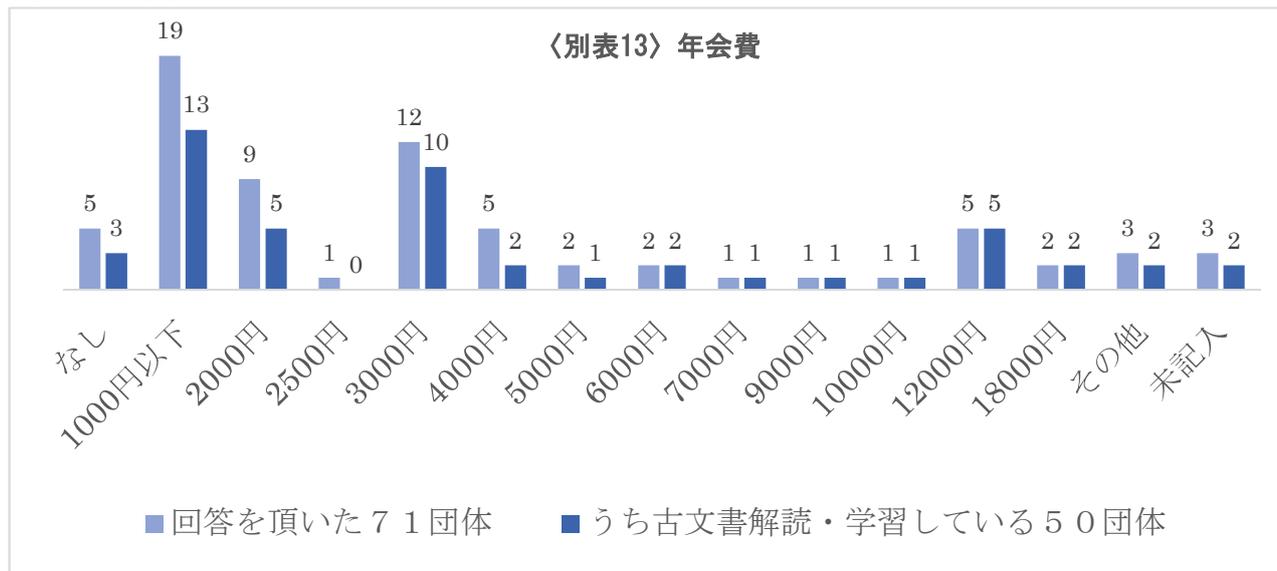
月1回以上2回未満	9
総会・講演会・研究大会など年数回	5
年6回	2
月2回	1
その他	4

【「その他」】

- ・法人業務として通年活動
- ・春秋の祭りと文化祭で公演（年15～20回）
- ・今は活動していない

解読学習団体の活動回数は〈別表11〉のように、月2回が6割を占める。つまり、月1回か2回活動している団体がほとんどであり、これは過去調査もほぼ同様である。解読学習をしていない団体の場合は〈別表12〉のように、多様な活動形態が見て取れる。

質問9 年会費 ※「約」と記載の場合は「約」を取り除いた金額で集計



【その他】

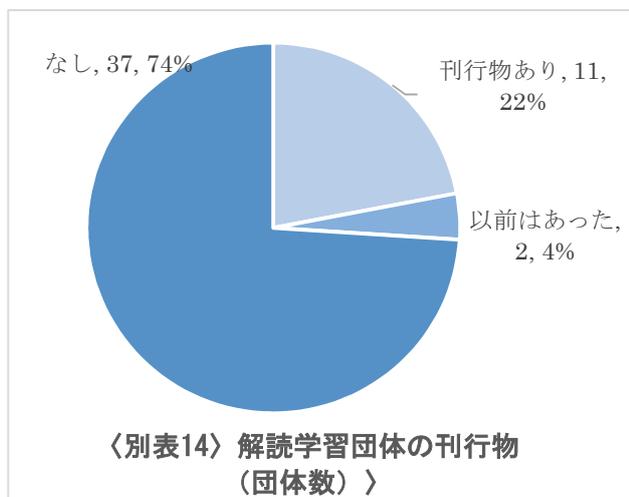
- ・1回200円 ・1000～2000円 ・購読会員1000円・賛助会員5000円〔1口〕

解読学習団体の年会費は1000円以下が最も多く、26%を占める。次いで3000円が20%を占め、3000円以下を合計すると62%を占める。年会費のほかに「見学会等は随時集金」という団体もあった。

このため、年間にかかる費用はこの通りの金額ではない団体が存在する可能性がある。このことはもしかしたら、12000円が5団体、18000円が2団体あり、10000円以上を合計すると8団体となり、16%を占めることとも関係しているかもしれない。

一方、解読学習を行っていない団体は1000円以下が6団体（29%）、2000円が4団体であり、3000円以下を合計すると15団体で71%を占める。このように、この点でも解読学習団体とは大きな違いが見られる。

質問10 刊行物



〈別表15〉 解読学習していない団体の刊行物

刊行物がある	13
以前はあった	3
なし	5

解読学習団体における刊行物の有無の結果は〈別表14〉の通りで、刊行物のある団体は22%である。刊行物の内容は、解読の成果を印刷した積文集、史料集が多い。会誌・通信、三十年誌等もある。

一方で、「予算的に余裕がないのでしていない」「学習した地域の古文書を冊子資料という形で残したいが、費用がなく、できない。解説し、解説をつけてまとめたものがどンドンたまっていく」という回答もあった。

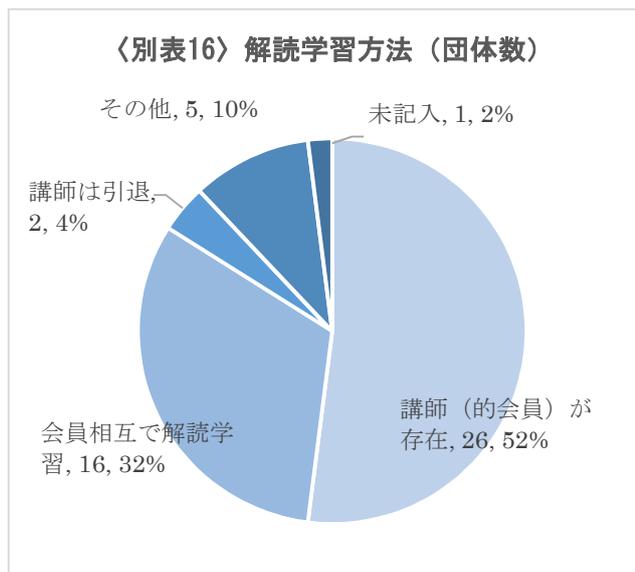
解説学習をしていない団体の結果は〈別表 15〉の通りで、刊行物のある団体が 62%を占める。内容は定期的な刊行物が多いが、中には研究の成果を図書として刊行したり、博物館の図録、紙芝居やカルタ（2 団体）等、多様である。

質問 1 1 古文書解説学習の有無（冒頭で扱ったのでここでは省略する）

以下「質問 1 7」までは「古文書の解説・学習を行っている」と回答した 5 0 団体の回答である。

ただし、参考のために、解説学習を行っていない団体の回答を紹介した箇所もある。

質問 1 2 解説学習方法



【その他】

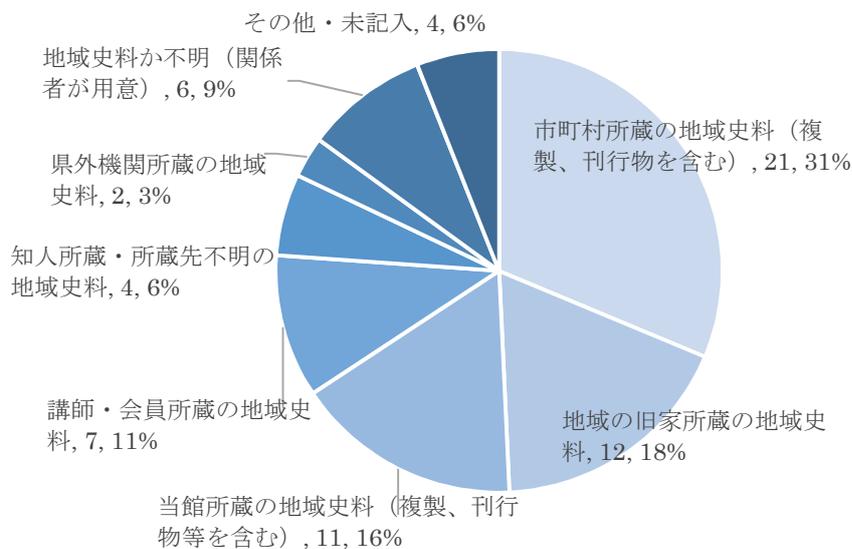
- ・月 2 回のうち 1 回を初心者向け学習会とし、他 1 回は市史資料を解説。
- ・1 回目は予習としてリーダー 3 名及び希望者が半読・発表・討議。2 回目は全員が班に分かれ、前記の学習の上、各リーダーが発表討議の上、判読文を作成。
- ・輪番制の司会による相互学習方式で、司会者が読み、間違いがあれば他の会員が指摘する。
- ・講師が引退するので、今後決める。
- ・学習会はなくなり自習。

地域の古文書をコピーし、会員各自で予習の後、学習会を行う（音読・解説発表・意見交換）、という回答が多かった。そこで、〈別表 16〉のように、学習の形態をまとめた。多かったのは「講師（的会員）が存在」（52%）、「会員相互で解説学習」（32%）である。

これは過去調査とほぼ同じであるが、平成元年度調査では、相互学習について「はっきりと『講師』に位置付けられていなくとも、「指導者」がいることを想定する必要がある」と指摘している。しかし、本調査では講師の引退に言及した回答が 3 団体あったほか、回答内容を見ても、実際に会員相互で解説学習を行っているようであり、以前に比べると、講師が存在して、指導する団体は減少した、と考えられる。

質問 1 3 古文書解読学習のテキストの内容及び入手方法

〈別表17〉テキストの内容と入手方法（複数回答）



【「その他」より】

- ・新聞で情報を得たものから興味のあるものを発表会用に読んでいる〔新会員増加、少しでも興味のある方発掘のため〕。
- ・4つの学習会の予習を行っている会なので、テキストは常にある。

具体的な内容は 33 件寄せられた。主に、群馬県内各地の江戸時代の村や町、宿場の様子がわかる古文書が中心であった。中には藩政に関する日記や、関所に関する近世文書、明治時代のキリスト教や養蚕・製糸に関わる文書もあった。煩雑を避けるため本報告では割愛するが、実際に会員の居住する地域に所在する古文書や、地域の歴史が読み取れる古文書が大半を占めることが把握できた。

入手方法は、古文書を借用して撮影したり、コピーする、という回答が多かった。そこで、地域の古文書（地域史料）かそうでない史料か、所蔵先はどこか、という観点で（別表 17）のようにまとめた（複数回答）。最も多いのは市町村の文化財関係部署や市町村史誌の関係部署、図書館、歴史資料室に収蔵されている地域の古文書で、31%を占める（複製や刊行物も含む）。次いで、地域の旧家に所蔵されている古文書が18%、当館所蔵の地域の古文書（複製や刊行物、インターネット講座テキストも含む）が16%を占める。以上の結果から、地域史料であることが明らかな古文書は実に85%を占める。また、市町村や当館等、県内の公共機関所蔵の文書が半数近くを占める。

しかし、平成元年度調査（全 48 件）では「地域の旧家や古文書所有者の文書」が 26 件と最も多い（42%）。次いで自治体所蔵の文書（コピーを含む）がその半数以下の 12 件、当館所蔵文書が 10 件と報告されている。平成 7 年度調査（全 61 件）でも、「地元旧家蔵文書」が 27 件で 45%を占めている。他は「講師が準備」7 件、「刊行物等利用」6 件、「図書館等蔵」5 件、「文書館蔵文書」5 件と続く。

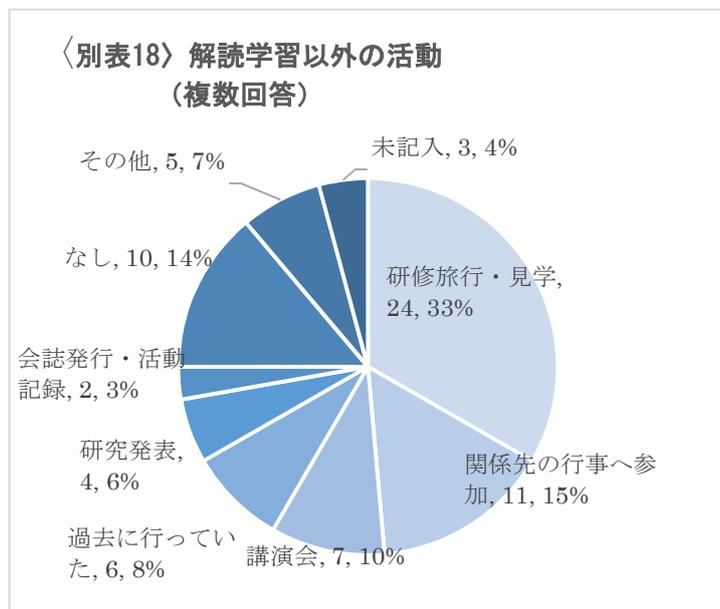
ここからは 2 つの可能性が考えられる。1 つはここ 20～30 年の間に、地域の旧家から市町村や当館へ文書が寄贈・寄託された、あるいは何らかの理由で地域外へ流出してしまった、という文化財保護に関する可能性である。もう 1 つは、地域の旧家には今も文書が所蔵されているが、市町村や当館所蔵の文書が求められている、という要望の変化の可能性である。今回は、いずれかは特定できなかったが、市町村や県による所蔵古文書の保存・活用のあり方、および地域の旧家等所蔵の古文書に対しても、文化財保護の観点から関わることの重要性が大きく増しているといえる。

（参考）「以前行ったことがある」5 団体の回答より。

- ・「前橋藩松平家記録」を読む会開催。

- ・中世・近世の古文書、松平家文書等。
- ・自治体史の委員を講師に、地域にある古文書を用いた歴史講座を年4～6回3年間開催し、テキストは「新編高崎市史」資料編の資料を含めて原本のコピーを市の利用許可を取って入手し読解。

質問14 解読学習以外の活動

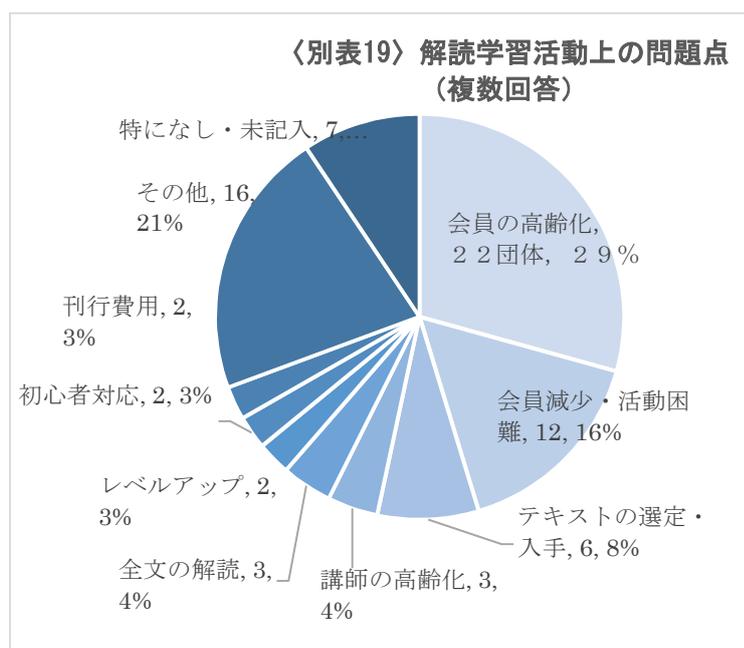


【「その他」より】

- ・現地調査（寺で年号を確認）。
- ・お花見（春）と古文書関連のお宝交歓会（秋）。
- ・忘年会と新年会。
- ・講師が年に1度、資料を家から持参し、各自に希望する本等やパンフレットをくださる。
- ・特にしていないが、ボランティアガイドをしている会員もあり、学習が生かされている。

解読学習以外の活動は〈別表18〉のような結果となった。研修旅行・見学・史跡巡りが最も多い。講演会や研究発表を行っている団体もある。「なし」「過去に行っていた」「未記入」が19団体ある。

質問15 解読学習活動上の問題点



【「その他」より】

- ・行事で展示しているが、一般の関心は薄い。

- ・ 講師の確保。
- ・ 地域住民の減少。
- ・ 資料を掘り起こし、後世に受け継ぐという自負をもち、活動しているが、費用がかかり、冊子資料にする方法がない。
- ・ 3年を目途に活動内容をまとめる予定だったが、5年が経過し資料集発行となったことによる今後の進め方。
- ・ 会員数が多く、午前組・午後組の人数のバランスが難しい。

活動上の問題点は〈別表 19〉のようにまとめたが、「会員の高齢化」には高齢化による会員減少、活動停滞、団体の活動困難等の回答が含まれている。また、「会員減少」は会員の減少による活動困難等を含み、高齢化に言及していない回答である。

本調査では会員・講師の高齢化（かつ後継の講師候補の不在）、会員の減少（による活動困難を含む）という、解読学習や団体存続の前提となる人的な問題を 37 団体が挙げた。これは全団体のうち、74%を占める。しかし、過去調査では、これに類する問題点は、平成元年度（全 57 件）では「会員が増えない」8 件（14%）、「指導者がいない」7 件、「出席状況が悪い」4 件、「会員の高齢化と後継者不足」1 件である。平成 7 年度調査（全 61 件）では「会員の減少・固定化」13 件（21%）、「会員の高齢化」4 件、「指導者の必要」2 件といった程度である。

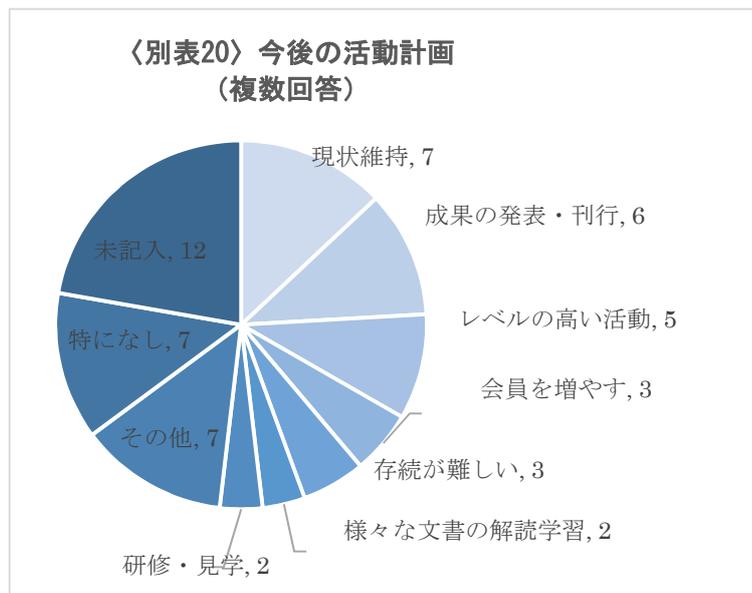
平成 7 年度調査では「（解読学習団体とそうでない団体の）両者に共通する最大の問題点は会員の減少・固定化（高齢化）があげられる。言い換えれば、新規会員（特に若年層）の増加が難しいといえる」と述べる一方、「解読学習を中心とする団体の場合、テキストの選択に困っている団体が多い」「会員の学力の差をどのように埋めるかという点が大きな問題となっている」と述べている（参考：「テキストの選択」9 件、「学力差」2 件）。つまり、関係者の高齢化や会員の減少は、過去においても「切実」な問題ではあったが、現在では、一層進み、深刻を極めているように思われる。

実際に複数の項目で、「現状維持が精一杯である」「以前のように活動できなくなった」「活動回数を減らす予定である」「いずれ活動できなくなる」といった内容の回答が寄せられた。また、調査の準備段階では、過去の資料に基づき連絡を取ろうとしても、連絡がつかなかったり、会員の高齢化や死去により無くなっていた団体が 20 以上あった。このような結果からは、近い将来における活動の低下・不振や、団体消滅の可能性を予測せざるをえない。

高齢化や会員減少の次には、解読学習そのものに関する問題が挙がっているが、「テキストの入手」6 件の他は、「全文の解読（の難しさ）」、「レベルアップ（の難しさ）」、「初心者への対応（の難しさ）」が数件ずつである。一定数を占める「その他」には、一括りにまとめられない個別の問題が多い。地域のために解読学習を行っているが、その成果を印刷する資金がないという、解読学習の根幹となる問題に苦しんでいる団体もあった。

また、以前に解読学習を行った団体からは「（古文書講座は）予想以上に受講者は多かったが、身近な史料が少ないので、継続しきれなかった」という回答が寄せられたが、この問題点も示唆的に思われる。

質問16 今後の活動計画



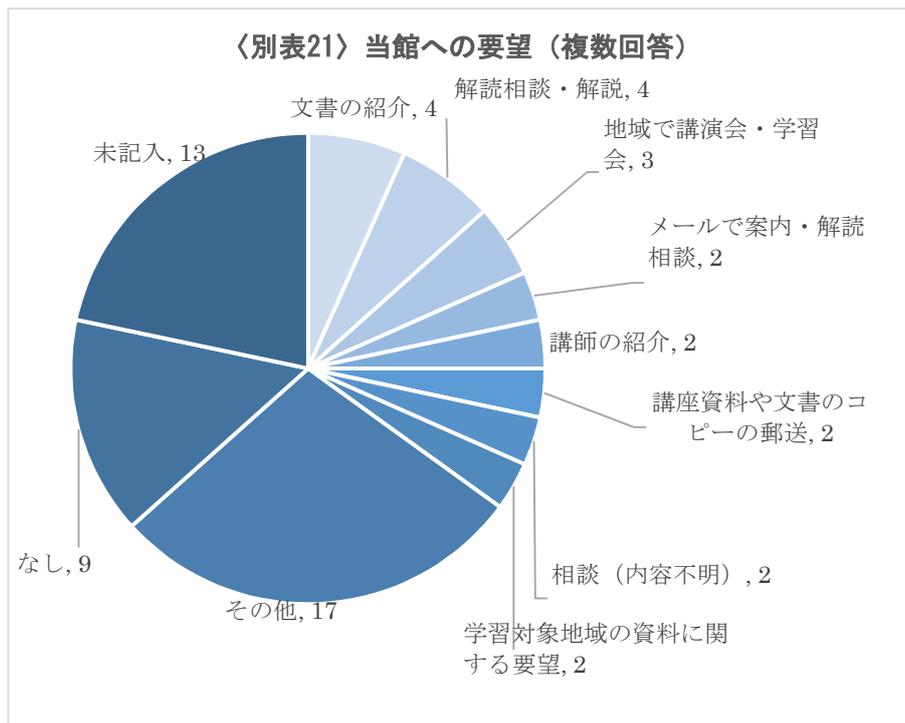
【「その他」より】

- ・ 地域との交流・俳諧等の講習会等を通じたまち起こし。
- ・ 古文書がたくさんあるので見てほしいという住民への対応。
- ・ 地域古文書愛好家へ資料集を紹介し、コラボレーション方法を検討し、メンバーのモチベーションアップできる方法を模索。
- ・ 高齢化に従い、行動が縮小されてきている。

「今後の活動計画」について、平成元年度調査では調査、刊行物、会の運営、学習方法等、様々な種類の計画が記載されていた（件数は不明）。平成7年度調査で最も多かったのは「資料集の刊行」16団体であり、次いで「見学会」12団体、「研究・調査活動」6件と続いていた。しかし、本調査では〈別表20〉のように、前述の高齢化・会員減少の問題が原因となっているのか、過去のよう活動計画は少ない。また、「特になし」「未記入」の団体が19あることも気付きである。実際、「現状維持が精一杯」「本会は会員が活力ある時期には、質問項目などはかなり積極的に行ってきたグループですが、高齢化に従い、行動が縮小されてきている」という回答もあった。

そのほかの質問項目の結果もふまえると、解読学習団体は、団体数は過去調査とほとんど変わらないものの、一定数の団体において、活動が活発であった以前のように活動できていなかったり、目標に比して満足のある活動ができていなかったりする等、いわば活動の“空洞化”が生じているのかもしれない。

質問17 群馬県立文書館への要望



【「その他」より】

- ・テキストの販売。
- ・解読講座の回数増加。
- ・インターネット講座の継続。
- ・解読指導者の育成。
- ・文書館の見学
- ・見学先の紹介。
- ・各種案内の提供。
- ・新規会員（候補）の紹介
- ・団体の刊行物、活動の紹介
- ・web での史料情報の公開
- ・文書の収集と公開の促進
- ・地区でも年1～2回の講演会・勉強会を県として開いて下さい。また、その際、地域での同好会立ち上げの音頭取りをして頂ければ幸いです。

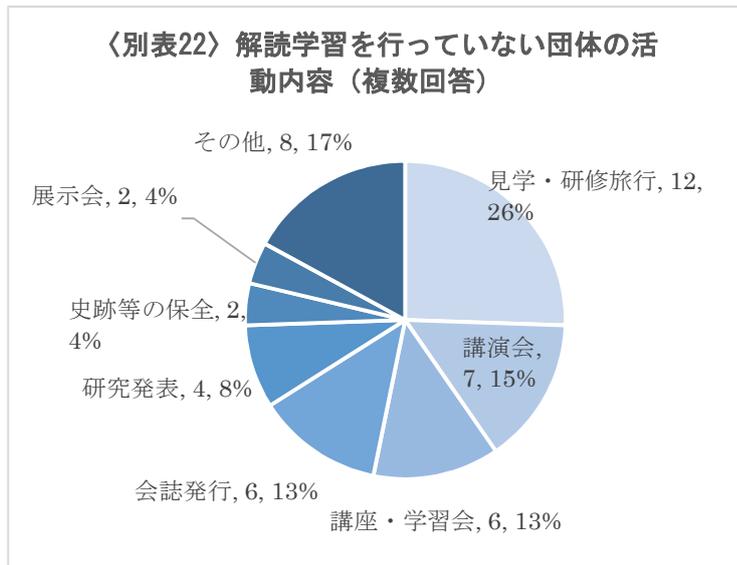
当館への要望は〈別表21〉の通りである。要望の種類自体は過去調査とほぼ同じであるが、平成7年度は「テキスト等」10件、「古文書集の刊行」4件という大きな特色があった。しかし、本調査では各要望が数件ずつに過ぎない。また、「その他」に入っている個別の要望が大半となっている。

多くの団体が高齢化・会員減少の問題を抱えていることがわかったので、その解決につながるような要望があれば良いと思うのだが、実際の回答全体を見ると、当館が要望を尋ねたためにわざわざ考えて回答してくれたところもあるように思われた。「なし」「未記入」の団体が22もあることも、前の質問16同様、気に掛かる。

以下は「古文書の解説・学習を行っていない」および「今は行っていない」21団体の回答である。

質問18 解説学習を行っていない団体の活動内容

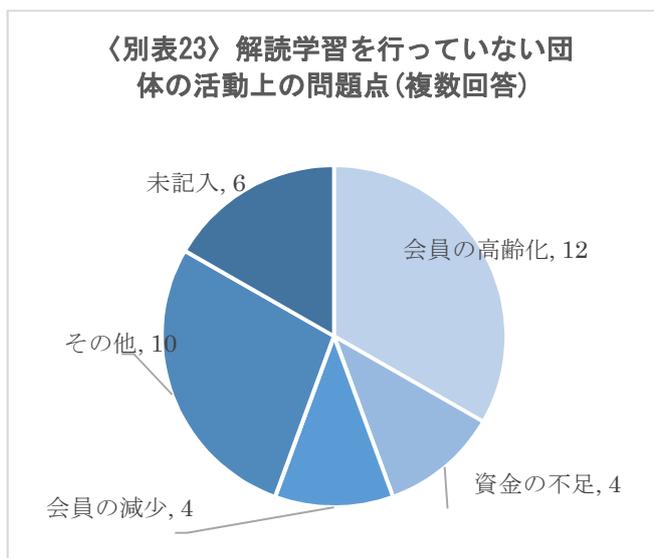
大まかな内容は冒頭で説明したので、(別表22)のように具体的な活動をまとめた。各団体が目的の達成のために様々な活動を行っていることがわかった。なお、質問10では刊行物について、「あり」が13団体、「以前あり」3団体、「なし」5団体である。



【「その他」より】

- ・ 地域で講話。
- ・ 伝統芸能の公演・子どもたちへの継承活動。
- ・ 研究大会・会誌発行のための各種委員会。
- ・ 資料の読み合わせ。
- ・ 会議・表彰式。
- ・ 地域の歴史カルタの解説。
- ・ 今は活動していない。

質問19 解説学習を行っていない団体の活動上の問題点



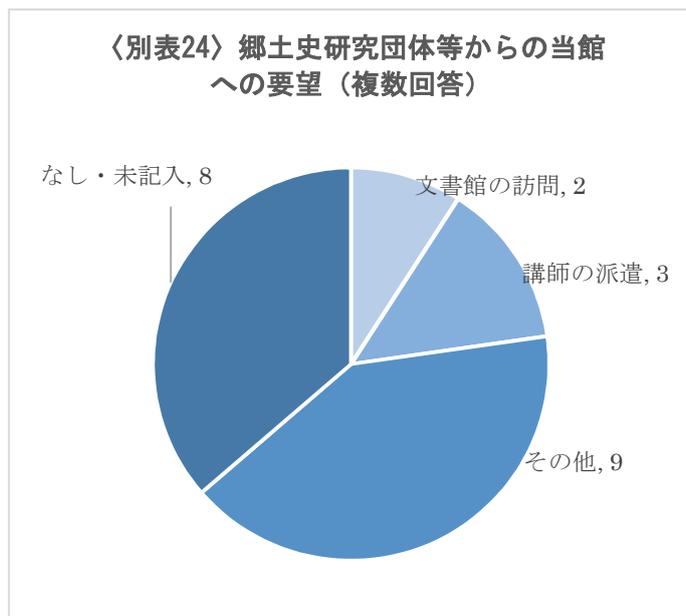
【「その他」より】

- ・ 関係する古文書の解説、資料の発見。
- ・ 講師の高齢化・後継の講師の不在。学習成果のまとめ。
- ・ 勤務先がないことによる若手研究者の不在。
- ・ 事務局移転による不安定な運営。高崎歴史博物館を創設することに努めているが、大きな目標なので力不足の感がある。会員の半数が現役であることによる時間的制約。

(別表23)にまとめたが、「会員の高齢化」には高齢化による会員減少、研究活動のマンネリ化、休会状態、見学先の限定、若年層の不在等の回答が含まれ、「会員の減少」は高齢化に言及していない回答である。

全体に、解説学習団体と同じく、高齢化と会員減少が最大の問題である。一方、「その他」では各団体が目的を達成するための様々な問題点が記述されていた。

質問20 解読学習を行っていない団体からの当館への要望



【「その他」より】

- ・情報が少ない。
- ・敷居が高い。
- ・講座、文書の公開等の企画をお知らせ頂ければ例会で会員に紹介したい。
- ・現代史にも力を入れてほしい。
- ・歌舞伎や人形芝居等古典芸能に関する古文書、資料・史料など収蔵して欲しい。そしてそれらの大事さを特別展等で公開していただきたい。
- ・企画展示。古文書の大切さ、意義が分かる広報活動。
- ・公文書管理法に基づく各市町村の公文書の保存管理状況調査。
- ・本県の地域文化（歴史、世界遺産）の向上に多大な貢献をしてきたという自負をもっている。文書館にはこれまでも会の事務や運営に様々な協力をしてきて頂いた。もちろん自立は目指しているが、地域団体との連携という視点で以前と同じように支援して頂ければとありがたいと思う。

〈別表24〉のように、当館の姿勢に対する指摘の他、各団体の活動内容や目的に基づき、個別の要望が多く寄せられた。一方で、「なし」「未記入」の団体が8もあるのが気に掛かる。

(以上)